

ある町田の普通

町田市立真光寺中学校 一年 小田 おだ 東依 とうい

町田市、それはある不思議な巨人が住んでいる市。

「ねえ、こんな時間だけど遊んじやって大丈夫かな」と心配性な巨人の子は言う。

「大丈夫、大丈夫。おもいつきり遊んじやおうよ。」と続いて陽気な怪物の子が言う。

巨人や怪物といっても今は、人間のサイズ فقط。

よしこれから遊ぼうという時、空に赤い球体と青い球体が激しくぶつかり合う姿が見えた。

「お父さんだ！」

二人の声がそろった。そして、赤い球体は巨人の子のそばに下りた。青い球体は怪物の子のそばに下りた。赤い球体の中からは巨人の父が、青い球体の中からは、怪物の父が出てきた。そして、巨人のお父さんが言った。

「ここで何をしているんだい？」

「友達と遊ぶところだよ」

「友達？だれが？」

「あの子だよ」

巨人の子が指した先に怪物の子が父の目に入った。

「まさか、あの子が友達！」

「そうだよ」

「えっと、友達を作るのはいいことだが、さすがに怪物の友達はやつと」

「どうして？」

そのころ、怪物の父子も同じ内容を話していた。

「いいか、お前にはあの子が遊ぶ相手だと思っているかもしれないが、あの子は普通闘う相手なんだ。」

「でも、そうしたら、この町田市に被害がおよんじやうかもしれないからいやだよ」

「あの子もきつと遊び相手が怪物だと思っているかもしれないが、普通はお前とあの子は敵同士なんだ。闘う相手なんだ。」

「でも、僕は町田市やあの子のことを傷つけないんだよ。」

そして、いつのまにか巨人の父子がそばまで来ていた。二人は肩組みをしながらお父さん達に言った。

「お父さん達の普通は闘うことかもしれないけど、ぼく達の普通は町田市で闘うことじゃなくて、二人で仲良く遊ぶのが普通なんだよ、普通闘う相手でも仲良くするのは出来るんだよ。」

二人のお父さん達は、恥ずかしそうに言った。

「そうか。それがお前達の普通なんだな。口をはさんで悪かった。これからは、学校が終わったら好きなだけ遊んでいいぞ。」

二人の子はそれを聞いて喜んだ。

「やったー。これからもいっしょに遊んでいいんだ！」

「おっと、もうこんな時間だ！早く帰りなさい。」

二人はそれぞれの家に帰っていった。

「ばいばい、また明日遊ぼうね」

という言葉をさけびながら。

さてと、父親同士はというと、

「さて、改めて始めようか。」

と言いながら、巨人の父は赤い球体に、怪獣の父は青い球に戻り、空にまい上がっていった。こうして、父の二人は「闘い」つまり二人の普通の時間を町田市の上空で始めたのだった。

審査員講評

巨人や怪獣が町田に住んでいるという飛躍した設定でありながら、子供同士や親子のやり取りが切実でリアリティーを感じました。登場する子供たちにとっての普通や、親たちにとっての普通、巨人や怪獣が当たり前に住んでいるというこの町の人にとっての普通など、普通とは何かを問う描き方もお見事でした。